公益の風 #11

東北公益文科大学
教授
呉　衛峰

文化交流を通じて相互理解へ

2021年3月、中国大手出版社の訳林（南京市）から藤沢周平作品集十二種が出揃った。訳者も中国の日本文学研究者の錚々たる名前ばかりで、畏友の程長泉先生（青島大学）による『用心棒日月抄』シリーズ四冊の翻訳は『浪客日月抄』という中国語訳タイトルで上梓されている。中国本土にとどまらず、台湾でも好評を博している。

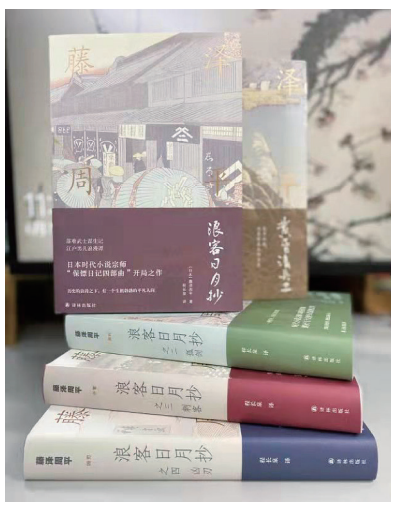
筆者の知っている限り、村上春樹は中国を含めて世界的人気を誇っているが、藤沢周平は英語世界では認知度が低く、作品の翻訳も2005年の英訳一冊（同じ内容のものがスペイン語訳も出ているが）に留まっている。東アジアにおける文化交流の広さと深さを物語る興味深い現象である。昔は庄内を知らない人に「おしん奉公のところ」と教えれば分かってもらえていたが、今は「海坂藩のモデル」で通じるであろうか。

グローバリゼーションの進む中、庄内地域にも様々な国から人々がやってきており、我々は否応なしに文化のルーツが異なる隣人たちと付き合う時代に突入したのである。心温まる出会いもあれば、価値観の差異によるトラブルもあったに違いない。二十年前の留学生大量受け入れの失敗という苦い経験により、もしくは一部のマスコミの偏向報道によって、地元の外国人の増加に対して戸惑いを感じる方もいるのがむしろ自然な現象である。とはいえ、各自治体が国際交流活動に力を入れてきたおかげで、昨今は一昔前と比べて地域内の異文化相互理解がかなり改善されている。

異文化が交わるとき、「郷に入れば郷に従え」と「朋有り遠方より来る、また楽しからずや」という二つの側面はともに大事である。筆者は公益大の「文化交渉論」（大学院）などの講義のなかで異文化理解の難しさを説明する時、以下の知見を紹介している。「歴史を勉強すれば分かるように、近代ナショナリズムの洗礼を受けて成立した国民国家において謳われてきた『民族文化』は、そもそも絶対的なものではない。しかし、民族感情は外側から見ると『創られたもの』が多く看取されるにも関わらず、内側からは『自然なもの』として受けとめられるというジレンマが常に存在する」、と。他者の存在を認識してはじめて自己が確立するが、そこにとどまらず、他者を理解する努力を経てはじめて本当の自己理解が成立するのではなかろうか。要するに、人間同士であるので、交流を通じて相手を知り、そして自分がどのように見られているのかが分かることで相互理解が深まり、一歩ずつグローバルもしくはグローカルな社会を築くことができよう。

公益大は一貫して文化交流と異文化理解の教育と実践を行っており、この十年間、東アジアと東南アジアから慎重かつ着実に留学生の受け入れを進めている。そして海外の協定校との間、アメリカの二校のほかに、中国語圏の五校と留学生の相互派遣を行ってきた。これからの課題は教員（研究者）間の交流を進めることではないかと思われる。

地域の大学として、公益大は今後も地元における文化交流の一翼を担い、庄内の調和的でグローカル的な発展に貢献するであろう。



藤沢周平作『用心棒日月抄』シリーズの中国語訳

「敬天愛人」2022年5月号 Vol.158掲載（荘内日報社発行）